

---

---

# テキストとしての御嶽信仰

——御座儀礼が生みだす〈ものがたり〉——

小林 奈央子

〈名古屋国際高等学校〉

---

## はじめに

岐阜県と長野県をまたぐ独立峰、木曾御嶽（3067m）を霊山として崇める御嶽信仰は、関東・東海地方を中心に全国に広がっている。この御嶽信仰において、信仰の伝承化に大変重要な役割をはたしているのが、「霊神」に対する信仰と、神降ろし儀礼である「御座」の儀礼である。

まず、御嶽信仰における「霊神」とは、御嶽行者として修行を積んでいる（積んだ）者や、御嶽の信仰活動に貢献している（した）信者に対し、死後および生前に授与される「神位」のことを指す。通常「〇〇霊神」というように表現され、江戸後期に木曾御嶽を大衆に開放し、開闢の祖とされる尾張出身の覚明、武蔵出身の普寛もそれぞれ「覚明霊神」、「普寛霊神」と呼称されている。また、二人の「覚」や「普」の字を継承する霊神名が代々数多く見られ、それ以外に、所属御嶽講の講祖や師匠の一字を受け継いでいる霊神名も多い。つまり、霊神名自体が、その霊神の来歴を語り、誰の法流を継ぐ者なのかという表明にもなっているのである。そして、これらの実在の人物に依っている霊神が、死後、御嶽大神や不動明王などの神仏と同様、信仰・礼拝の対象として、あるいは本尊として、各御嶽講において崇め祀られていく。

また、各御嶽講でおこなわれる神降ろしの巫儀、「御座」によって、神仏や霊神が降臨・託宣をすることも御嶽信仰の大きな特徴となっている。一般的に御座は、憑坐役の「中座」と中座に神霊を降ろす神霊統御役の「前座」が向い合って挙行されるもので、前座のコントロールによって、神霊が中座に憑依し託宣をする。一般的に、降臨する神霊の中で神仏は上位に置かれ、短時間だけ降臨し全体に対する簡単な挨拶や助言をおこなうと、たちまち昇天してしまう。しかしその一方で、元々人間であった者が神格化した霊神は、神仏のレベルより低位に置かれ、頻りに降臨しては比較的長時間留まり、全体に対する挨拶のみならず、個々の信者が向ける相談に回答したり、信者の身体に御祓いや加持付けなどをおこなったりする。それゆえ、霊神は、信者にとって一番身近な崇敬対象であり、神仏と信者の間をつなぎ、御嶽信仰を下支える重要な存在となっている。

本稿では、以上のような御嶽信仰における霊神に対する信仰や御座儀礼について、テキストという切り口から考察をおこなう。前半は、御嶽信仰をテキストとして読み解こうとする場合、いかなる要素が見えてくるかを検証する。後半は、御座儀礼を儀礼テキストという観点から考察し、御座に見られる、「霊神—信者」間の〈双方向的〉な対話から生成されるさまざまな信仰の〈ものがたり〉と、それが信者の間で語り継がれ、御嶽信者の間で伝承化していくという点に注目してみたいと思う。

## 1 テキストとしての御嶽信仰

テキストは文字や言語といった狭義のテキストだけを意味するわけではない。文字に表わされない行動や儀礼、口承文学、もちろん信仰も、同様に読み取り可能なテキストとして捉えられる。文化や宗教を象徴の

体系、象徴のテキストとして把握するべきであるとしたクリフォード・ギアツは、すべて「意味を運ぶもの」は象徴であるとし、「宗教を宗教たらしめている諸象徴に具体的に表わされている、意味の体系の分析」が肝要であるとした（ギアツ 1987：208）。彼に従えば、言語や文字ばかりでなく行為も、それが意味を運ぶかぎりにおいて象徴であるといえる（小泉 2006：152）。御嶽信仰においても、先に挙げた霊神に対する信仰や御座を中心に、文字・言語テキストはもちろんのこと、それ以外にも多様なテキストが見られる。

まず、霊神になる、ということは、ただ神位を授与されるだけのことではない。霊神となった者は、その霊神名が各御嶽講の「霊神台帳」に記録され、死後は拝殿や霊神碑（霊神の依り代とされる石碑）に祀られ、永代、講中の崇拜や供養の対象となる。ほかにも、霊神名を書いた掛け軸が、そのまま神号軸として礼拝の本尊の役割を果たすことがある。さらに、各御嶽講で勤行の際に使われる勤行集にも、神仏名に続いて霊神名が記載される場合があり、勤行における「神呼」などの神仏名読み上げの際には、神仏名とともに霊神名も読み上げの対象となる。これは、神仏や功績のあった歴代の先達らに自らも名を連ねられるといった荣誉として意識されるほか、死後も講中を守護する“祭神”の一人となり、そこで信者に祭祀・供養され続ける存在となることを意味する。さらに霊神は、実在の人物であるということから、生前の姿に似せた霊神像や御影軸が作成されることもあり、それらが霊神碑などと同様、勤行の際の本尊、礼拝対象物として使用されることもある。

このように、御嶽信仰における霊神は、祭神、拝殿、霊神台帳、神名読み上げ、霊神碑、霊神像、御影軸、神号軸、そして後述する御座儀礼など、御嶽信仰のほぼすべてに登場し、御嶽信仰を象徴する代表的な存在となっている。また、こうした御嶽信仰の一つ一つのモノや事象が、霊神に対する信仰をベースに包括的かつ有機的に結びつき、秩序立てられた御嶽信仰の世界——テキスト——を形成しているといえるのである。

その世界観の特徴を示す一つとしては、菅原壽清が既に言及している「階層化された神霊観」がある（菅原 2002）。菅原は、上位から「御嶽大神→諸神仏→霊神」という三元的構造からなる階層化された神霊観が、山の高低（頂上→麓）に応じて、山中の霊神碑の配置、神影軸中の神霊の配置にも共通して見られることを指摘している（図参照）。特に、木曾御嶽の8合以上は、現在でも「御山」あるいは「御山神国」などと尊称で呼ばれ、本格的な「聖域」はここから始まるとされている。昔は8合目の金剛童子で必ずワラジを新しいものに履き替え、ここから上での用便は紙の上にしなくてはならないなど（生駒 1966）、それより下の山中とは峻別されていた。このような人々の行為は、8合以上を「高神」の鎮まる場所とする信仰の表象である。現在、ワラジの習俗は消滅しているが、トイレの設置されていない場所で用を足す場合は、半紙の上でするように信者に指示を下したり、御神体である山を傷付けないよう金剛杖は必要以上に強く突くなど注意したりする御嶽講もある。また、8合で小休止をとり、「これ以上は聖域であるため、穢れた心を持ち込むな」と、御山の領域に入る前に今一度心構えを説く講長もいる。

山肌だけを見ても、そこに境界線があるわけでもなく、実際、一般の登山愛好家は何事もなく素通りして行ってしまう。しかし、信者にとって8合以上は、特別な場所であり、特別な信仰上のルールが存在する。そして、信者はそのルールに従った行動を見せるのである。登拝中の信者によってなされる一挙手一投足には、さまざまなコンテクストに応じた意味がある。

さらに、信者自身の行動だけでなく、御座を介した可視的な変化も同時に起こる。8合を過ぎてから、明らかに、御座で降臨する神霊の神位が高くなり、「高神」の世界に入ったことを信者たちは認識する。降臨のスピード、回数も増す。また、法力の強い行者になると、「中座—前座」で向かい合って降霊の準備をせずとも、「飛座」といって突如中座の身体に神霊が憑依し、託宣を始めるといった現象が起こる。信者はこのような可視的な変化を目の当たりにすることで、「御山神国」を実感（あるいは体感）し、信仰心を強めていくのである。

以上のように、文字や言語に拠らないモノや事象、人々の行為の中にも、読み解くべきテキストが存在す

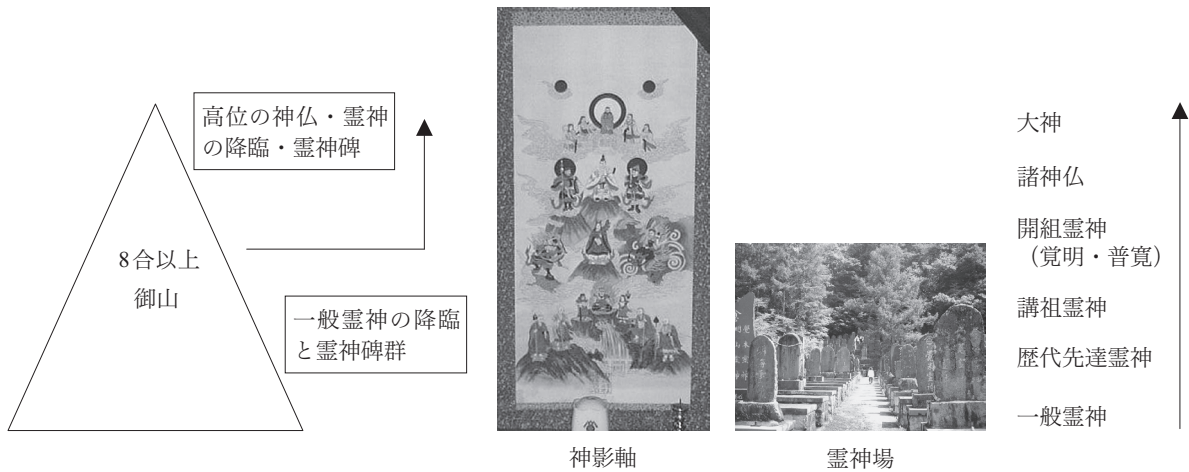


図 御嶽信仰における神観念 (小林奈央子作成)

るのである。というよりもむしろ、一般民衆の信仰の世界では、いわゆる聖典など、文字で書かれたテキストよりも、こうした具体的なモノ・事象・行為・体験などを信仰生活の拠所にするの方が長い間主流だったと思われる。特に近代以前では、一般民衆の信仰生活や思考は、聖典の言語から直接影響を受けることは少なかった(島薮 1992:3) はずである。

御嶽信仰にも統一的な宗教聖典は存在しない。近年、普寛のおこなった御座の託宣記録を記した写本が発掘され、その調査が進んでいるが<sup>1</sup>、開關の祖である覚明や普寛が自筆し、信者に向けて書き残した聖典類は一切ない。一般の信者が拠所にしてきたものは、拝殿やそこに祀られた本尊や像、掛け軸や絵の類、祭具、日々の勤行とそこで得た体験、口伝え、あるいは耳で覚えた祝詞や経典、真言や呪文など、五感をフル活用して、「体感」していくようなものであったはずである。宗教あるいは信仰のテキストには、五感を研ぎ澄まさないければ獲得できない要素が数多く含まれている。また、御座という独自の儀礼の発達により、御嶽信者は、覚明や普寛が生前に聖典を残さずとも、霊神となった彼らの言葉を、彼らの死後も託宣で聞くことができた。それが御嶽信仰の最大の特徴であり、他の山岳信仰が衰退していく中、御嶽信仰がいまなお継承されている大きな要因であろう。

以後は、この御座儀礼とテキストの関係に注目する。

## 2 御座儀礼により生み出される〈ものがたり〉

御座は、冒頭で述べたように、憑坐役の中座と神霊統御役の前座が向い合い、前座が中座の身体に神霊を降ろすという巫儀である。行が深まり、「独座<sup>どくざ</sup>」とって、自力で神霊を憑依させることができたり、山中などの聖域で突然神がかり状態になる「飛座」が可能な中座(座人<sup>ざじん</sup>、神代<sup>かみしろ</sup>ともいう)もいる。中座に憑いた神霊は、前座の呼びかけに応答し、まず神名を述べ、信者全体あるいは個人に対する託宣をおこなう。場合によっては、中座に憑依したままの状態、中座の身体を借りて信者に加持や御祓いを授けることもある。

そのような憑依状態の間、信者たちは、中座役の行者を、平常時の彼／彼女であるとは認識していない。もはや彼／彼女は、憑依した神霊そのものとして扱われる。彼／彼女が見せる喜怒哀楽や語りは、憑依した神霊自身のものと解され、加持や御祓いは、神霊そのものが手ずからおこなっていると実感されるのである。それゆえ日々の御座では、憑依状態で託宣する中座の手をしっかりと握り、その呼びかけに熱心に受け答え、

1 埼玉県大滝村の御嶽普寛神社所蔵の『普寛行者道中日誌』、埼玉県両神村の御嶽神社所蔵の『武尊山開關記』と無題の託宣記についての調査が、中山郁によって進められている(中山2007)。

感謝の言葉を述べたり、涙したりする信者の姿がしばしば見られるのである。

多くの信者にとって一番身近な憑依神霊は、神仏そのものよりもむしろ、生前「人」であった霊神である。御嶽信仰の世界観においては、神仏そのものより神位は格下であり、御座に頻繁に降臨し、末端で衆生救済をする神霊であるといえる。実在した人物であるため、生前付き合いがあったり、面識があるなどして、親近感を持っている信者も多い。また、筆者が集中的に調査をおこなっている東海地方の御嶽講では、霊神が、自分の祖父や祖母など親族関係の先祖である場合が非常に多く、御座の場があたかも亡くなった先祖との再会・交流の場のようにもなっていることもある。

さらに、信者によれば、憑依中の中座の表情や声、くせ、語る内容は、憑依している霊神の生前の様子をよく反映しているという。ある夏山の御座で、男性の中座に自分の母親の霊神が憑依した男性信者(60代)は、「いまの表情なんか……ああやっぱり母親だなあって思いますよ」と目を潤ませながら語ってくれた。もちろん、生前の様子を知らなくても、憑依中の中座の表情や声のトーン、語る内容によって、その霊神の“ひととなり”を窺うことはできる。概して、降臨した霊神は、いつも同じような態度、同じような口ぐせで託宣するため、生前を知らない信者も「〇〇霊神は、厳しい」、「△△霊神は、優しい」といった具合に、表にあらわれた言葉や態度などから、憑依した霊神のそれぞれを評している。すなわち、当然のことながら、表情や声といった身体的特徴も、「何かを語る」テキストなのである。

では、霊神はどのような内容を託宣で語るのでしょうか。霊神から、信者全体に向けての一般的な託宣は、祭礼行事の準備や参列に対する謝辞や、今後の行事に向けての激励、徳の付与や守護の約束、訓示などである。「朝から(春季大祭の)準備ありがとう。待っていたよ」(2005.4.17覚明霊神)、「一人一人(参拝から)立ち帰るまで我が見送る」(2008.2.18日出講祖覚成霊神)などのような言葉が掛けられる。一方で、個別の相談内容には、病気や家庭問題、進学や就職、資格試験、試合など、個々人によりさまざまであり、多岐にわたる。たとえば、

信者：「新しいデイケア施設での仕事の誘いを受けました。この仕事を受けるべきですか？」

覚明霊神：「誘いを受けた方へ進めばよい。示談により進みて苦しからず。覚明深く守護しわたす」

(2007.12.11)

というように、通例、簡潔ではあるが、相談者に守護を約束し、不安を与えないような回答がなされる。そして、特筆すべきは、それが〈双方向的〉なコミュニケーションであるということである。信者が悩みを投げかければそれに対する回答を霊神がする。また他方で、霊神が何か要求したり、心情を投げかければ(霊神も「最近霊神碑の供養がなされず寂しい」などと心情を吐露したり、供養の要求をする)、聞き手の信者がそれに答える、といった具合である。つまり、場面、場面の〈双方向的〉な〈やりとり〉の中から、さまざまな話——テキスト——が次々と紡ぎ出されていくのである。

もちろん、このような霊神との密な〈やりとり〉は、一般信者に対してだけでなく、「行者—霊神」間でもある。とりわけ行者の場合は、御座での託宣が、その人の修行人生の指針となっていく場合が多い。ここではまず、神奈川県に住む女性行者Yさん(94歳)の事例を挙げてみよう。

Yさんは「寺でも神社でもどこでもお参りするのが好きだった普通の女性」であったという。それが家庭を持ってしばらくしてから「いきなり幣を握り」、独座で神の言葉を受けようになり、愛知県の覚明系の御嶽行者のもとで修行するようになった。

そのYさんが昭和20年代半ば、「吉野へ行くように」との託宣を覚明霊神から授かる。Yさんは「御嶽の行者の私がなぜ吉野なのか？」と、吉野金峯山寺の蔵王権現との出会いを喜びながらも、自分が吉野へ遣わされた理由が判然としないまま過ごしていた。それから数年後、Yさんは降臨した覚明霊神から「我も吉野東南院で修行した……御嶽と吉野をつなげたい」との託宣を受ける。吉野東南院とは、金峯山寺より異(東南)の方角に建てられた塔頭の一つである。Yさんはそこで初めて、「御嶽の行者」である私が、覚明霊神



の託宣により吉野へ導かれたわけを得心することになる。そして、それ以降は、(いわゆる山伏の鈴懸姿ではなく)「御嶽の装束のまま」吉野へ参拝することへの自信と意義を見出し、90歳を越えた現在でも、「御嶽のPRのため」といって吉野へ出かけているという。

しかし、実は、歴史的人物としての覚明が東南院で修行をしたということを確定する史料は発見されていない。にもかかわらず、Yさんに限らず、「覚明が吉野東南院で修行した」という伝承を語る人は多く存在する<sup>2</sup>。このように、歴史的資料、正典としての記述、記録、いわゆる文字テキストがない話であっても、Yさんのように、御座の託宣を介して当該の霊神から直接“真相”を聞くという人もいるのである。

そして、そのように受けた託宣の内容を周囲に語ったり、さらにそれを聞いた人が別の人へ伝えるなどして、その話は次第に史実であるように——というよりむしろ信者にとっては、その内容が史実であるかどうかの精査は必要なく、御座で霊神が語った言葉が「真実」となるのであるが——御嶽講中で語り継がれていくのである。

ほかの事例でも見てみよう。愛知県に住む女性行者Aさん(67歳)の行者人生は、Aさんが「おじいさま」と呼び慕う、役行者の霊神とともにある。

Aさんは、独座により役行者をはじめとする神霊を降ろす法力の強い御嶽行者の伯母を持ち、幼いころから御嶽信仰とともに生きてきた。40代のころ、役行者の託宣で、「すぐ病院で肺を診てもらえ」と言われた。しかし、病院のレントゲンには病巣は映らず、Aさんはそのまま病院から帰された。しかし、またすぐ次の御座で役行者が来臨し、今度は「肺を急ぎ手術してもらえ」との託宣が下りる。Aさんは心を決め、医師に「とにかく切開してください!」と直訴した。「自分から切開を要求するなど頭がイカれた患者だ」と病院中で噂されたが、いざ切開してみると、肺の一部が壊死しており緊急手術となった。医師らは不思議がったが、Aさんは、役行者の託宣を最後まで信じたことで命拾いしたと語る。

そして、60歳の時、Aさんは35歳の次女を病気で亡くすという非常につらい経験をする。供養のためと、次女が生前好きでよく通っていた金峯山寺で結縁し、61歳から吉野東南院の奥駈修行を開始した。

その後、年に1回の奥駈修行を5回満行し、5回目を終えた65歳の時、一つの区切りがついたことと体力的な限界を感じて、Aさんは奥駈修行の引退を決意した。Aさんは御座で役行者に「今年で奥駈はやめます」と伝えた。すると降臨した役行者は、「わかった。でも死ぬまで行は続く……これからは(勤行の際)太鼓をやれ」とAさんに託宣したという。つまり、一つの行を卒業しようとする行者に、次の行を霊神自ら提示してきたということである。ちなみに前出のYさんも、吉野一件に限らず、修行の折々で、行者としての針路を御座の覚明霊神によって示されてきたと語っている。

さらにAさんは、奥駈修行を引退ししばらく経ったころ、低山であっても単独での登拝や行を止めるよう役行者から警告を受けた。それゆえ、彼女は、最近、新たな行場を求めて知多四国八十八ヶ所巡礼を友人と始め、またグループでの四国八十八ヶ所巡礼への挑戦も計画している。

以上のように、Aさんのライフストーリーは、常に役行者の託宣とともにあったとすることができる。しかしながら、興味深いことは、Aさんがその託宣にただ依存していたのではなく、託宣を受けながらも決断はいつも自分でしてきた、そして、新たな道を自分自身でも探ろうと積極的になってきたということである。御座で神霊の託宣を受け、それで終わりというのではなく、それを受け、そこからいかに考え、いかに行動していくかという余地は、Aさんにも与えられているのである。それは、Yさんの場合も同様であり、託宣ではすべてを与えられず、行者としてその託宣をどのように捉え、また実践していくかは、本人に委ねられている。そして、多くの場合、受け手である行者が決断し、アクションを起こすと、それに対し霊神から新

2 東南院の紹介文にも、覚明が入門し、修験の奥義を極めた場所であるという沿革が記載されている(役行者霊蹟礼所会編 2002:50、または、<http://www.ubasoku.jp/organization/36jisha/touanin.htm>)。

たな助言や針路が示される、といった不断の〈やりとり〉が続いていくのである。御座における「神霊—信者（行者）」間の〈やりとり〉には、こうした「相互行為」（interaction）が多分に見られる。

最後に、なぜ御座における託宣を、筆者が副題のように〈ものがたり〉と位置付けるのかに論を移したい。

筆者は、今までさまざまな御嶽講での御座を調査し、御座を介して神霊と〈やりとり〉する人々の話を聞いてきた。ある時、その一つ一つを回想し、一つ一つが「ものがたりだ」とふと感じたのである。すると、それを決定づけるかのように、前出のYさんが、ある御座での印象深い経験を語ってくれたのである。

Yさん講中は、ある夏、山頂へは登らず3合目の霊神場で御座を立てた。その御座には、木曾御嶽山頂を少し下った所に鎮座する「賽の河原の地蔵」が降臨し、「今日は花火がきれいですね」としみじみ託宣したという。御座の後、Yさんたちは、なぜ賽の河原の地蔵が降臨し、このような託宣をしたのか、理由が分からず、不思議に思っていたという。すると、その後、頂上から下山して来た人が、「昨夜は頂上で花火が上がった」という話をYさんたちにしたため、一同合点がいったというのである。

その時の様子を、語り手であるYさんは、実に幻想的に美しく、聴き手である筆者の想像をかき立てるように語ってくれた。「きれいですね」のひとつは、もし地蔵菩薩が声を発したらこんな感じであろうかと思いを馳せるほど、筆者の耳に印象深く残った。そして、Yさんは、その地蔵の話語りを終えた最後に、「こうしたものがたりがあるんです」と付け加えられたのである。筆者が御座の調査を通し漠然と抱いていた「ものがたり」という感覚と、Yさんの口から出た言葉が図らずも同じであったことも、このような副題を設定する一つのきっかけとなった。

おそらくYさんは、この地蔵の話、筆者に語ってくれたように、周りの人々や信者の人たちに、幾度となく語ってきたに違いない。そして、そこから、Yさんのこの体験は、さまざまな人々を経て語り継がれるうちに、御嶽にまつわる信仰物語——テキスト——となっていくのだろう。しかし、一方では、個々の聞き手の受け止め方によって、微妙に違いのある話として、あるいは改編された形で伝承されていく可能性もはらんでいる。「物語る」という行為は、新たな〈ものがたり〉をも生成していくのである。

そこに、副題をあえて「ものがたり」とひらがな表記にしたことの意味がある。御座での「神霊—信者（行者）」間でダイナミックに創出されていく〈やりとり〉、また、その場で生成され続け、さらに語り継がれている御嶽の信仰物語の性質を、意味を限定的にしてしまう漢字表記では伝えにくい。もし、あえて漢字で表記するならば、始めと終わりをもった完結したストーリーを表す、漢字2字の「物語」ではなく、「語りの行為」そのものを指す、動詞的・動態的な「物語り」（野谷 2007：14）の方が近いだろう。

## 結 語

以上、御嶽信仰の核となる、霊神信仰と御座儀礼について、テキストという切り口から見てきた。霊神は、文字テキストの上だけでなく、拝殿、霊神碑（像）、御影軸や神号軸、そして御座の儀礼など、御嶽信仰のめぐるあらゆるモノ・事象にあらわれる。霊神は、礼拝の対象として祀られるだけの静的な存在ではなく、御座に降臨し、託宣や御祓い、加持付けなどをおこなう動的な存在である。それは同時に、本来「見えない」はずの霊的存在を、御座という場を使って可視的なものにするということでもある。憑坐役の中座に著しい変化が起これ、憑依する霊神ごとに異なる表情や声、態度を見せる時、あるいはまた、患部に直接触れ加持付けがなされる時、信者はあらゆる身体器官を働かせ、そこに霊神の存在を「感じる」のである。儀礼の象徴に特徴的なことは、人間の五感に作用する感覚特性を有していることであり、儀礼の中で、他の手段では得がたい経験が生み出されている（竹沢 2007：199）。そして、それは必ずしも文字テキストとして残されるわけではない（むしろ残すことをタブーとするような場面も多い）ものなのである。

また、御座でおこなわれる「神霊—信者」間の〈やりとり〉は、一方的なものではなく、〈双方向的〉になされる。神霊、信者ともに発話・応答し、その相互行為の中からさまざまな〈ものがたり〉が創出されて

いく。そして、その〈ものがたり〉が処々で語られていくことによって、次第に御嶽信仰の信仰物語となっ  
ていたり、新しい別の〈ものがたり〉を生んだりしていくのである。

#### 参考文献

- 生駒勘七 1966 『御嶽の歴史』木曾御嶽本教総本部。  
 ヴァン・マーネン, ジョン (森川渉訳) 1999 『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法』現代書館。  
 役行者霊蹟札所会編 2002 『役行者霊蹟札所巡礼』朱鷺書房。  
 川又俊則 2002 『ライフヒストリー研究の基礎—個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教』創風社。  
 ギアツ, クリフォード (吉田禎吾ほか訳) 1987 『文化の解釈学 I・II』岩波書店。  
 小泉潤二 2006 「9 解釈人類学」綾部恒雄編『文化人類学20の理論』弘文堂。  
 小林奈央子 2007 「御座儀礼と霊神信仰—中部地域の御嶽講の事例をもとに」『山岳修験 別冊 日本における山岳信仰と修験道』。  
 坂部恵 2007 「自己物語から他者物語へ—ナラティブ・トランスポジション」宮本久雄・金泰昌編『シリーズ物語論3 彼方からの声』東京大学出版会。  
 島藺進 1992 「1章 宗教思想と言葉—神話・体験から宗教的物語へ」脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学2 宗教思想と言葉』東京大学出版会。  
 菅原壽清 2002 『木曾御嶽信仰—宗教人類学的研究』岩田書院。  
 竹沢尚一郎 1987 『象徴と権力—儀礼の一般理論』勁草書房。  
 竹沢尚一郎 1992 『宗教という技法—物語論的アプローチ』勁草書房。  
 竹沢尚一郎 2007 『人類学的思考の歴史』世界思想社。  
 ターナー, ヴィクター (梶原景昭訳) 1981 『象徴と社会』紀伊國屋書店。  
 ターナー, ヴィクター (富倉光雄訳) 1996 『儀礼の過程 新装版』新思索社。  
 中山郁 2007 『修験と神道のあいだ—木曾御嶽信仰の近世・近代』弘文堂。  
 野家啓一 2007 「物語論の可能性」宮本久雄・金泰昌編『シリーズ物語論1 他者との出会い』東京大学出版会。  
 山田富秋編 2005 『ライフストーリーの社会学』北樹出版。